

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	研究 0-1
1. 教育学部・教育学研究科	研究 1-1
2. 連合教職実践研究科	研究 2-1

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
教育学部・教育学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
連合教職実践研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している

教育学部・教育学研究科

I	研究の水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における1年間当たりの研究業績の発表状況について、論文発表数は154件から205件、著書は36件から68件、学会発表は166件から264件の間を推移している。

以上の状況等及び教育学部・教育学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に教科教育学、数学解析、数学基礎・応用数学の細目において特徴的な研究成果がある。また、教育学の分野では各教科教育学の関係学会における論文発表、教科書・指導書の作成、教材や体育補助具開発等、教科専門に関わる分野では、国内外の専門誌への論文発表や創作活動で成果をあげている。
- 特徴的な研究業績として、教科教育学の「シティズンシップ教育におけるグローバルスタンダードに関する研究」及び「小学校音楽科授業における子どもの質的認識に関する研究」、数学解析の「力学的境界条件に付随する総体積保存則に注目した偏微分方程式の可解性について」に関する研究、数学基礎・応用数学の「トポロジカルな2次元非圧縮流体の研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に地理学、芸術一般の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、地理学の「災害からの都市復興と防災・減災教育の研究」、芸術一般の「具象彫刻の研究」がある。

以上の状況等及び教育学部・教育学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、教育学部・教育学研究科の専任教員数は 113 名、提出された研究業績数は 14 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 12 件（延べ 24 件）について判定した結果、「S」は 6 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 4 件（延べ 8 件）について判定した結果、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間における1年間当たりの研究業績の発表状況について、論文発表数は154件から205件、著書は36件から68件、学会発表は166件から264件の間を推移している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 衣生活に関わる研究で平成26年度人間—生活環境系学会論文を受賞しているほか、高等学校化学教育に関わる研究、防災・減災教育の研究、柔道指導用補助具の開発研究等で成果をあげている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

連合教職実践研究科

I	研究の水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- プロジェクト研究「海外の大学とのネットワーク構築による国際化の展開」の一環として、教職大学院における教員養成カリキュラム開発に資することを目的に「教職大学院における豊かな国際性を育成するカリキュラムの改革」研究を実施している。また、科学研究費助成事業の採択を受けて、「教職大学院において質の高いコミュニケーション力を形成する教育方法の開発的研究」等の教職大学院の教育改善に資する研究を複数実施している。

以上の状況等及び連合教職実践研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に教育学、教育工学、臨床心理学の細目において特徴的な研究成果がある。また、外部専門家を交え、教職大学院における教育活動、研究活動に関する報告及び討論を行う実践報告フォーラムを毎年度開催している。
- 特徴的な研究業績として、教育学の「学校管理職の育成に関する研究」、教育工学の「メディア・リテラシー教育のためのカリキュラムの開発と評価」に関する研究、臨床心理学の「精神分析におけるエナクトメント概念の意義」に関する研究がある。

以上の状況等及び連合教職実践研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、連合教職実践研究科の専任教員数は10名となっている。

学術面では、提出された研究業績3件（延べ6件）について判定した結果、「S」は3割となっている。

(※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和)

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 教職大学院における教員養成カリキュラム開発に資することを目的とし、「教職大学院における豊かな国際性を育成するカリキュラムの改革」の研究を実施している。また、科学研究費助成事業の採択を受けて、教職大学院の教育改善に資する研究を実施している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 実践報告フォーラムを毎年度開催し、教職大学院における教育活動、研究活動に関して、外部専門家による講演を開催するとともに、『京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報』を刊行し、実践報告フォーラムに関する内容のほか、研究論文、実践報告等を掲載している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。